

マクシム・ゴーリキイの発展の特質

宮本百合子

青空文庫

一九三六年六月十八日。マクシム・ゴーリキイの豊富にして多彩な一生が終つた。ちょうどソヴェト同盟の新しい憲法草案が公表されて一週間ほど後のことであつた。ゴーリキイはこの新憲法草案の公表によつて引き起されたソヴェト同盟内によろこびと、世界のそれに対する意味深い反応とを見て生涯を終つた。それより前に、ゴーリキイが重病であるという記事を新聞で読み、毎朝新聞を開くごとにその後の報知が心にかかつっていた。新しい憲法草案公表のことが、報道された時、私はその事から動かされた自分の感情のうちに、ゴーリキイが自分の生涯の終りに於てこの輝かしい日に遭遇したということを思い合せ、ゴーリキイは出来るだけ生かしておきたい、しかし、もし死んだとしても、彼は歴史の一つの祝祭の中に葬られる、これは美しいよろこびにみちた生涯の結びでなくて何であろうか。そう思い、そしてゴーリキイのなじみ深い、重い髭のある顔と、広い肩つきとを思い浮べるのであつた。

一九三二年以後のゴーリキイ、芸術に於ける社会主義リアリズムの問題がとり上げられるようになつて後のゴーリキイは、世界の文化にとつて独特の影響を与えていた。五六年計画の達成と、それによつて引き起されたソヴェト同盟の社会的現実の変化は、さながら

一つの強大な動力となつて、マクシム・ゴーリキイが六十有余年の間に豊かに蓄えた人間的経験、作家としての鍛錬、歴史の発展に対する洞察力と確信などのすべてを溶かし合わせ、すべての価値を發揮させ、世界の進歩的な文化を守るために活動させたと観察され、「どん底」を書いたのは四十年前であり、その頃から各国語に翻訳されて読まれるという意味ではゴーリキイは若い時から世界的な作家であった。しかし、最近数年のゴーリキイが世界的であったという意味は、それよりもっと深まつたものであつたと思う。多くの人の興味を引くという意味で世界的であつた彼は、晩年に於て人類の文化の正当な発展のために、今日の地球になければならない楔の一つとして、われわれ文化の進歩を確信するものすべてによつて愛し、尊敬される存在となつていたのである。

私がゴーリキイに会つたのは一九二八年であつた。彼が五年ぶりに、イタリ―からソヴェト同盟へ帰つて来た時のことで、当時ゴーリキイは、ソヴェト同盟に自分が永住するかどうかということについても、はつきり心を決めていなかつたようであつたし、彼としては予想したよりはるかに盛大な、心からの歓迎に感動しつつ、今日から考えると、日の出前の空が、とりどりな暁の色で彩られているような、ある複雑な不決定と、期待、歓喜が彼の感情を満していたように察せられる。

静かな朝の十月大通りを見下す方角に大きな窓が開いている。赤っぽい、そう新しくない絨毯が敷いてある。その部屋の隣室へ通じるドアの近くにゴーリキイが腰かけている。シャツも上衣も薄い柔かい鼠色で、それは深い横皺のある彼の額や、灰色がかって、勁さと同時に感受性の鋭さを示している瞳の表情、特徴のある髭などとよく調和して感じられた。彼は、低い平凡なホテルの肘掛け椅子にかけて、大きいさつぱりと温い手を自然に組み合わせている。斜向いのところに丸テーブルがあつて、その上には、もうさめ切つた一片のトーストが皿に入つてのつている。私が細い赤縞の服を着てそのテーブルに向い、わきに立つて私の上にかがみかかっている友達に、時々綴りを訊きながら、本の扉にロシア語を下手な字で書きつけている。私はゴーリキイに、自分の小説を一冊贈るために持つて行つた。その扉に「予想されなかつた遭遇の記念のために。マクシム・ゴーリキイへ」と、日本字で書いてそれをゴーリキイに見せたらば、彼は、日本字が読めなくて残念だと云い、その意味をロシア語でわきへ書いておいてくれと云つた。私はそれを書いているのであつた。書きあげて、子供より下手だと笑いながら見せた。するとゴーリキイは眞面目な、親密な調子で、「なに、結構読める」と、別に笑いもせず答えた。その云い方と声とが今も心に残つている。

あのゴーリキイがもうい、彼の残した沢山の蔵書に交つて何処かに、私のあの本もあるのかと思うと、何か一口に云い現せない心持が私をみたす。何故なら私の記憶の前には、中川一政氏によつて装幀された厚い一冊の本と、ゴーリキイの如何にも彼らしい「なに、結構読める」と云つた声とがまざまざと結びついて生きていて、その思い出はゴーリキイという一人の大きい作家の生涯の過程を私に会得させるために、驚くほど微妙な作用を残しているのである。

ソヴェト同盟の文学史において、マクシム・ゴーリキイは、たとえて見れば最後の行までぴつちりと書きつめられ、ピリオドのうたれている大きい本の一頁のような存在である。私たちは、自分たちの頁の数行をやつと書いたに過ぎない。ゴーリキイの生き方、作家的経験から若い時代の汲みとるべき教訓は實に多いと思われる。今日までに刊行されているゴーリキイの作品の全集や、最近の文化・文学運動に対する感想集等の外に、今後はおそらく周密に集められた書簡集、日記等も発表され、ますます多くの人にゴーリキイ研究の材料と興味とを与えることであろう。

ゴーリキイは、全く新しい歴史的内容において世界的な意義をもつ大作家にまで完成した一典型である。ゲーテを従来の理解に従つて天才者の一典型と見るそれとは本質的に異

つた意味で、人類の歴史が現段階に於て出現させた大才能の社会的完成の注目すべき一典型なのである。下層階級出身のゴーリキイが、そこに到るまでの道ゆきに於て、顕著な特色の一つが、今私の探求心を刺戟している。それは、ロシアのそれぞれの時代の社会的背景の前に鮮かに記録されているゴーリキイと、当時のインテリゲンツィアとの相互関係の消長である。

マクシム・ゴーリキイが五つで父に死なれて後、引取られて育った祖父の家の生活は、無知と野蛮と、家長の專制とで、恐るべく苦しいものであった。農奴解放は行われたが、その頃のニージュニ・ノヴゴロドの下層小市民の日常生活の中心では、まだ子供を樺の枝でひっぱたくことはあたり前のことと考えられていたし、大人たちが財産争いから酔っ払って血みどろの掴み合いをしたりすることはザラであつた。小さいゴーリキイの心臓はそういう暗さ、残酷さ、絶え間なく投げ交されている悪口などによつてその皮をひんむかるようを感じていたのであつたが、その貧と喧騒との中で、彼は一人の風変りな男となじみになつた。祖父の家の台所の隣りに、長い、二つの窓のついた部屋があつた。一人の痩せた猫背の男で、善良そうな目をもち、眼鏡をかけた下宿人が暮していた。何か祖母から云われる度にその男は、「結構です」と挨拶するので、「結構さん」というあだ名がつい

ていた。小さいゴーリキイは、この下宿人の暮しぶりに非常な好奇心を動かされた。彼は物置きの屋根の上に這い上つて、中庭ごしにその下宿人の窓の中の生活を観察するのであった。そこにはアルコール・ランプがあつた。いろいろの色の液体の入つた罐、銅や鉄の屑、鉛の棒などがあつた。これらのゴタゴタの間で「結構さん」は、朝から晩まで鉛を溶かしたり、小さい天秤で何かをはかつたり、指の先へ火傷をしてうんうんとうなつたり、すり切れた手帳を出して、何かしきりに書き込んだりする。

ゴーリキイは、興味を押えられず、お祖母さんに聞いた。

「あの人は何してるの？」

するとお祖母さんはこわい声で、

「お前の知ったこっちゃない、だまつていな」

と言い、おばあさんが警戒するばかりでなく、家中の者が揃つてこの毛色の変つた下宿人を愛さなかつた。みんな「結構さん」をかけでは嗤わらつて、贋金つくりだの、魔法師だの、背信者だと噂している。荷馬車屋、韁靼人の従卒、軍人とジャム壺をもつて歩いてふるまいながらおしゃべりをすることのすきな陽気なその細君などという下宿人の顔ぶれの中で、この「結構さん」は何という変な目立つ存在であつたことか。

ゴーリキイはだんだんこの「結構さん」と仲よくなつた。ある晩、有名な物語上手である祖母の話を聞いているうちに、この「結構さん」は激しく涙を落しあじめ、興奮して長くしゃべつたあげく、いきなり恥かしそうに、そつと部屋を出て行つた。人々はきまり悪るげに見交しながら苦笑した。荷馬車屋が、「旦那方はみんなあんな風じや。」不機嫌に、毒々しく云い放つた。翌日その「結構さん」が祖母の傍へびつたりよつて、驚くほどの單純さで「僕は恐ろしいほど一人ぼっちです」と云つているのをゴーリキイは聞いた。その言葉がゴーリキイの幼い心につきささつた。家中で、幼いゴーリキイのいうことに耳を傾けてくれるのはこの「結構さん」ばかりであつた。祖父はゴーリキイを怒鳴りつけた。

「無駄口しやべるな。悪魔の水車め！」

だが「結構さん」は、ゴーリキイの話を注意深く聞いてくれるばかりでなく、微笑しながら、しばしば彼に云つた。「ふむ、そりや兄弟、そうじやないよ、そりやお前が自分で思ついたのさ。」或は、二つの優しい打撃で「嘘つけ兄弟！」そして、ゴーリキイの話の中に織り交る、すべての余計な不信実なものを切り去るのであつた。又この「結構さん」は、極くありふれた云い方で、しかも野蛮な環境の中で暮している幼いゴーリキイの智慧の芽生えを刺戟するようなことを云つた。例えば、彼は云う。

「あらゆるものを取りることが出来なくちゃならない——分るかい？ それは非常にむづかしいことだ、取ることが出来るということは……」

字もまだ書くことを知らない小僧であるゴーリキイには何も分らなかつた。しかし、そういう言葉は心の中に残つていて、何か特別な心持で繰りかえし思い出された。何故なら、この簡単な「結構さん」の言葉の中には彼に忘られない秘密があつた。石つころだの、パンのかたまりだの、茶碗、鍋だのをとるだけのことであるならば、何も「結構さん」のむずかしがる特別な意味はある筈はないのだから。

祖父の家の中庭の隅に、誰にも見捨てられた 苦蓬にがよもぎ の茂つた穴がある。小さいゴーリキイは「結構さん」と並んでその穴に腰かけている。ゴーリキイは「結構さん」に訊いた。

「何故あの人達は誰もお前を愛さないの？」

「結構さん」はゴーリキイを自分の温い脇腹に抱きよせ、目くばせしながら答えた。

「他人だからさ——分るかい？ つまりそれだからさ。ああいう人達でないからさ」

彼等とは異つた一人の者、「他人」として、「結構さん」はゴーリキイの騒々しくて、悪意がぶつかり合つているような幼年時代の生活の中に現れた最初のインテリゲンツィアなのであつた。が、ついにこの「結構さん」が祖父の家から追い出される時が來た。それ

は、或る家畜の群の中に一匹たちの違う動物がまぎれ込んだあげく、やがていびり出されたのに似ていた。はつきり説明もつかないような憎悪が、「結構さん」を追つたのであつた。ゴーリキイは深い悲しみの感情をもつて「幼年時代」の中に書いている。「自分は故国にいる無限に多い他人——その他人の中でもよりよい人々の中の最初の人間と私との親交は、このようにして終つた。」

この物語はゴーリキイにとつて記憶から消えぬものであつたと共に、今日の読者である私たちの心をも少なからず打つものがある。一八六〇年代の終り、七〇年代の初頭にかけての民衆生活の重い暗さと、そこへ偶然まぎれ込み光の破片となつて落ちこんで来たのは「結構さん」のような知識人のタイプ、「おお、他人の良心で生きるものではない」と嘆く一種の敗残者であつたということ。しかも、同じ貧窮と汚穢の中に朝から晩までころがされながら、尚民衆は「結構さん」の中に「旦那」「他人」を嗅ぎわけて、本能的に仲間はずれに扱つたということ。それらが、幼いゴーリキイの知性の目覚まされてゆく生活の過程として、私共の心を打つのである。

更にこの「結構さん」とのことでの、はからずゴーリキイの全生涯の方向を暗示するまことに面白いエピソードが「幼年時代」に語られている。

或る日、「結構さん」の部屋で、「結構さん」は煙の立つ液体をいじって部屋中えがらつぽい匂いで一杯にしている。ゴーリキイはボロのしまつてある箱の上に腰かけている。

そして、二人は話している。

「お祖父さんは、お前はもしかしたら賄金を拵えてるんだって云ってるよ」

「お祖父さんが？……うむ、そう。——それはあの人人がいい加減をいつているんだ！　金銭なんぞというものは、兄弟——下らんものさ」

「じゃ何でパンの代払う？」

「うむ、そうだね——パンの代は払わなくちゃならない。まつたくだ……」

「そうだろう？　牛肉代だつておんなじさ」

「牛肉代だつてか……」

彼は静かに、驚嘆するほど可愛く笑い、まるで猫にするように私の耳を擦つて云う。

「どうしても僕はお前と口論は出来ない——お前は私を参らせるよ、兄弟。それよりも、さあ、黙つてよう……」

読んでここへ来ると、私たちは思わず身じろぎをして快い笑いに誘われながら、ああ、ゴーリキイ！　と思わずにはいられない。この短い、小さい逞しい人生についての問答は、

私たちに後年チエホフが云つた一つの言葉を思い起させる。二十四歳で、ロマンティックな作家として世に出たゴーリキイに向つて、チエホフが「知っていますか？」と云つた。そのことを思い起させる。更にそれから後、「哲学の害」を書いたゴーリキイ自身を、そして、その晩年に於て、新しい人類的見地に立つリアリズムの理解によつて六十八年の全蘊蓄の価値を傾けて民衆の歓びとなつたマクシム・ゴーリキイの終曲^{フイナレ}の美しさに思い到らせるのである。「結構さん」と、泣くことのきらいな小さいゴーリキイとの間に交わされたこの問答の中からは、ゴーリキイを通して民衆的なものの見かたの本質と、旧時代のインテリゲンツィアの特性の一面とが、鋭い対立を示して現れている。この注目すべき性質の対立は、ゴーリキイが十五歳になり、カザン市へ出かけて当時の急進的学生たちとの交渉が始まるにつれ、一層その社会性、歴史性に於て複雑な内容をもつて深められ、発展するに至つたのである。

十五歳でもゴーリキイは既に自分を年よりだと感じる程重く生活からの雑多な印象に満たされていた。

学校で受けた教育と呼ぶことの出来るのはマクシム・ゴーリキイの全生涯を通じて小学

校の五ヶ月のみである。祖父は急速度に零落し、七歳の彼も「錢」を稼がなければならなくなつた。彼は屑拾いをした。オカ河岸の材木置場から板切や薪をかつぱらつた。「盜み」ということは場末町では決して罪悪とされていなかつた。それは習慣であり、又半ば飢えている町人にとっての殆ど唯一の生活方法なのであつた。」

靴屋の見習小僧。製図師の台所小僧兼見習。辛棒のならないそれ等の場所の息苦しさから逃げ出して、少年ゴーリキイはヴォルガ河通いの汽船の皿洗い小僧となつた。到るところで彼は「ぼんやりする程激しく労働した。」そして、彼の敏感な感受性と自分の生活、人々の生活を熟考せずにはおけない気質とは、人々の中にあつて益々多くの疑問にぶつかった。

例えば、汽船の皿洗い小僧として、十三歳のゴーリキイは朝から晩まで皿を洗う。鉢を洗う。ナイフを磨き、フォークと匙を光らせていなければならない。だが、一方には、そうやって洗つた皿を一つ一つまたよこし、鉢を使い、ナイフや匙をきたなくしてゆく人々がいる。それらの人々は全く平気に、全く当然なこととしてやつてているのだが、何故これは当然なのだろう？ 朝は六時から夜半まで働いているゴーリキイの少年の心には疑問が湧いて来る。何故、一方に何でもしなければならない人々があり、もう一方にはそれらの

人々に何でもさせた結果を利用することの出来る人々が存在するのである。彼の周囲の生活の中には、泥醉や喧嘩や醜行やが終りのない堂々めぐりで日夜くりかえされているのだが、それらすべては何のために在るのだろう。

当時、ゴーリキイは、汽船の料理番スムールイに読むことをおそわつた。初めはマカロ二箱にこしかけて、『ホーマー教訓集』『毒虫、南京虫とその駆除法、附・之が携帯者の扱い方』などという本を音読させられた。が、だんだん『アイヴァンホー』を読み、『捨児トム・ジョーンズの物語』を読み、「知らず知らずの間に読みなれて」彼にとつては「本を手にするのが楽しみになつた。本に物語られていることは、気持よい程生活とかけ離れていた。そして、生活の方は益々辛くなつて行つた。」スムールイは、どこか普通の子とちがうゴーリキイを愛し、時々無駄に過ぎてゆく自分の一生に腹を立てたように怒鳴つた。
 「そうだ、お前にや智慧があるんだ、こんなところは出て暮せ！」

然し——何処へ？

愈々深く大きくなる「何故」という疑問、社会の矛盾に対する苦惱が、ついにマクシム・ゴーリキイを古いニージュニの場末町から押し出した。ゴーリキイは、カザンへ出た。彼はカザンで大学へ入ろうと決心したのであつた。ニージュニで知り合つた彼より四つ年

上の中学生が美しい長髪をふりながら彼のその計画を励ました。

「君は生れつき科学に奉仕するためを作られているんだ。——大学はまさに君のような若者を必要としているのだ。」

ところが、カザンに到着して三日経つと、ゴーリキイは、自分が大学なんぞへ来るよりはペルシャへでも行つた方が、もう少しは気が利いていただろうということを知つた。彼独特な「私の大学」時代がはじまつた。ゴーリキイは、その時代のことをこう書いている。「飢えないために、私はヴォルガへ、波止場へと出かけて行つた。そこで一五、二〇カペイキ稼ぐことは容易であつた。」と。

これらの波止場人足や浮浪人、泥棒、けいす買い等の仲間の生活は、これまで若いゴーリキイがこき使われて來た小商人、下級勤人などのこせついた町人根性の日暮しとまるでちがつた刻み目の深さ、荒々しさの氣分をもつてゴーリキイを魅した。彼等が、極端な無一物でありながら、貧と悲しみの境遇の中で自分たちの何にも拘束されない生きかたを愛していること、この人生に対して露骨な辛辣さを抱いていること、それらがゴーリキイの好奇心と同情をひき起したのであつた。ゴーリキイは、この群のうちにあつて「日毎に多くの鋭い、焼くような印象に満たされ」「彼等の辛辣な環境に沈潜して見ようという希望

を呼び醒された。けれども、屑拾い小僧であり、板片のかつぱらいであつた小さいゴーリキイを、かつぱらいの徒党のうちへつなぎきりにしなかつた彼の天質の健全な力が、この場合にも一つの新しい疑問の形をとつてその働きを現わした。これらの連中は、いつ、何を話してもどつまることは「何々であつた」「こうだつた」「ああだつた」と万事を過去の言葉でだけ話す、その事実にゴーリキイの観察と疑惑がひきつけられた。この彼等の意味深い特性の発見は次第にゴーリキイの心に或る恐怖を感じさせた。ゴーリキイの若い精神は、社会の汚辱と矛盾に苦しめば苦しむ程激しくよりよい人生の可能を求めた。彼は未来を、これからを、よりましな「何ものかであろう」ところの明日から目を逸すことが出来ない。ゴーリキイは彼等のように生きてしまつた人々の一人ではなかつた。ゴーリキイは生きつつある者、しかも熱烈に生きんとしているものの一人なのである。「このことが、彼等から私を去らしめた。」マクシム・ゴーリキイは、その自伝的な作品「私の大学」の中で活々と当時を回想している。「私は外部からの助力を待たず、幸福な機会というものにも望みをかけなかつた。が、私の中には次第に意志的な執拗さが発達し、生活の条件が困難になればなる程、それだけ堅固な賢くさえある自分を感じた。私は非常に早くから人間を作るものは周囲の環境への抵抗であるということを理解した」のであつた、と。

こういう心で、ゴーリキイはカザン市の貧民窟「マルソフカ」の一部屋に、大学生プレツトニヨフと生活しているのであつた。彼の全心に「ほんやりとした、しかし、これまで見たすべてよりももつと意義のある何物かへの欲求」を抱きつつ。

ゴーリキイとプレツトニヨフとは、「どん底」の一室にたつた一つの寝台をもつて暮していた。ゴーリキイはそこへ夜眠つた。プレツトニヨフは、交代に昼間。貧しいこの大学生はカザンの新聞社へ夜間校正係として働き、一晩十一カペイキずつ稼いで來た。ゴーリキイに稼ぎがなかつた日は、この心を痛ましめる睦しい同居者たちは四片のパンと二カペイキの茶、三カペイキの砂糖だけで一日を凌ぐことも珍しくない。ゴーリキイは波止場稼ぎをしばしばやすんだ。プレツトニヨフのすすめで科学にとり組む仕事をはじめた。教師の試験をうけるようなどいうのであつた。

独習者の新鮮、真面目な努力で、どんなに若いゴーリキイが、この科学の克服に熱中したかということは想像される。そして、このむずかしい仕事の中でも手に負えないのが、ゴーリキイにとつては文法であつたというのは面白い。彼は、幾分極りわるげに、しかし或る誇りを潜めて書いている。「私はその中に、生きた、困難な、気儘で柔軟なロシア語をどうしてもはめこむことが出来なかつた。」この科学との取組みは案外早く終りを告げ

た。小学教師の試験を受けるにゴーリキイはまだ若すぎることがわかつたのであつた。

ところで、この朝、この「過ぎ去つた人々や未来の人々の騒々しい植民地」の一隅に変つたことが起つた。そこの住人であつた一人の廃兵と労働者とが憲兵に引っぱられた。プレットニヨフはこのことを知ると、興奮してゴーリキイに叫んだ。

「おい！ マキシム、畜生！ 走つてけ、兄弟、早く！」

ゴーリキイは、合図の言葉を知らされて、「燕のように迅く」或る場末町へ走つて行つた。そこは小さな銅器工の仕事場であつた。そこには異様に青い眼をもつた縮毛の男がいた。ゴーリキイは、社会の下積の者の炯眼で、一目でこれが眞実の労働者ではないことを観破したのであつた。

この端緒から、当時のカザンに於ける急進的な学生、インテリゲンツィアとゴーリキイとの接触がはじまつた。ゴーリキイは、墓場の濃い灌木の茂みの中でもたれる彼等の集りにいつた。すると、彼等は波止場稼ぎの若者であるゴーリキイが「何を読んだか」ということを厳重に聞いた上で「彼等の研究会でゴーリキイも勉強するようになつた。そこでは、チエルヌイシェフスキイの註解附のアダム・スミスの書物を研究するのであつた。アダム・スミスの讀解は、ゴーリキイをひきつけなかつた。

「よその小父さん」の幸福と安逸とのために自分のすべてを消耗しているものにとつては実に明らかな事実について、むずかしい言葉でこんな大きい本を書く必要はなかつたといふ風に、ゴーリキイには考えられた。スミスが提出する経済学の命題は、生活から直接獲得されたものとしてほかなりぬ彼自身の皮膚の上に書かれている。――

然しながら、マクシム・ゴーリキイはその退屈をこらえ、「絶大な緊張をもつて、草鞋虫の這つている窖の壁を見つめ、坐りつづける。」彼の内心に疼いている数限りのない「何故?」がそこから彼を去りかねさせるのであつた。マクシムは、抑え難い感動をもつてゲルツエン、ダーウィン、ガリバルジなどの肖像を眺めた。そして、息苦しい室内に集つて真理を擁護しながら議論をわき立たせるこれら一団の人々が、よりよい人間の生活の招来のために献身していること、彼等の言葉の中には彼の無言の思いも響いていることを感じ、自由を約束された囚人のような狂喜でこれらの人々に対したのであつた。同時に、かつて経験したことのない妙なばつわるさ、居心地わるい瞬間が、ゴーリキイの生活に混りこんで来た。これらの学生達は目の前へ彼を置いて、「まるで指物師が並々ならぬものを作ることの出来る木の一片でも見るよう」な眼付でゴーリキイを眺めた。「子供が道傍でひろつた大きい銅貨でも見せ合うように、誇りをもつて」彼を皆に紹介し合つた。これ

は、ゴーリキイの氣質にとつて工合わるかつた。更に彼等は、ゴーリキイを「生えぬきだ！」、「まつたくの民衆の子だ！」と褒める。これもゴーリキイの氣を重く考えぶかくさせた。学生達は民衆を叡知と、精神美と善良との化身のように話すのであつたが、ゴーリキイが物心つくとからその日までその中に揉まれ、それと闘つて来た現実生活の下で、彼は「このような民衆を知らなかつた」のである。

一八八〇年代のロシアにおける急進的な学生達の姿は、ゴーリキイの思い出をとおして、髪髷と我らの前に立つ思いに打たれるのであるが、彼等はゴーリキイを生えぬきの民衆の子として珍重しつつ、ゴーリキイを、彼等流の教育で鍛えようとした。教師たちは、ゴーリキイに自由な本の選択を許さなかつた。読んだものについてのゴーリキイらしい批評を評価しなかつた。彼らは云うのであつた。

「君はこつちからやる本を読めばいいんだ。君に適しない領域には——首を突込むなよ」
こういう粗暴さはゴーリキイを焦立てた。

ゴーリキイが波止場稼ぎをやめ、パン焼工場で働くねばならなくなると、状態は一層悪く、とつて複雑なものとなつた。パン焼工場の地下室は、一日、十四時間の労働を強いた。とても学生達と会うことが出来なくなつた。彼等は、既にゴーリキイの旺盛な青年の生活

にとつて必要なもの、会つたり、聴いたりせずにはいられないものとなつてゐるのに、パン焼工場の地下室へ下りて行かなければならなくなつた時、その人々と彼との間には「忘却の壁が生い立つた。」学生等は、生活のためにパン焼工場へ入つた二十歳のゴーリキイが、彼等に会わなかつた前のゴーリキイではなくなつてゐるという重大な事実及び暗愚と無恥との中に入つて精神的に孤独な境遇に暮すことがゴーリキイにとつて、従前とは異つた苦痛となつてゐることなどを、不幸にしてちつとも洞察し得なかつたように見えるのである。

彼の生涯の中でも意味深い苦悩の時代がはじまつた。ロシアの民衆の中に藏されている健康な人間性、大きい才能の強力な發芽として歴史の上に登場した若いゴーリキイが、計らずも当時の情勢に制約され、苦しんだ内的過程の有様は、今日の私達をもさまざまの示唆によつてうつものがある。もし、無智と屈従とを意味する名称として解釈するその時代の習俗に従えば、ゴーリキイは既に盲目な民衆^{ナロード}の一員ではなくなつてゐる。さりとて、当時の急進的インテリゲンツィアたちが自身を指導者として外部から民衆に接触して行つた考え方従えば、ゴーリキイはそういう内容でのインテリゲンツィアとしてうけ入れることも出来ない。そんなに近いところで、デレンコフのパン焼工場の窯で日頃彼等の夢想

している民衆の本質的な一典型が発育しつつあるという驚くべき現実の豊富さを、その時は学生達も知ることが出来なかつた。もとよりゴーリキイ自身は知りようがない。ゴーリキイにとつて切ない精神上の板ばさみが続いた。

ゴーリキイの地下室仲間は、一般に、当時のインテリゲンツィアのもつてゐる進歩性の値うちを、素直にうけ入れられない程生活に圧しひしがれていた。例えば、パン職人たちの唯一の欲びは、給金日に淫売窟へ出かけることであつた。すると、そこの「喜びのための娘たち」は醉つぱらいながら彼等に、学生や官吏や「一般に小綺麗な連中」に対する悪意のある哀訴をした。それをきくと、「教育のある人達に対する片輪の伝説」で毒されているゴーリキイのパン焼仲間は不可解なものへの嘲笑と敵対心を刺戟され毒々しい喜びで目を閃かせながら叫ぶのであつた。

「ウー。教育のある連中は俺達よりわるいんだ！」

こういう仲間に、ゴーリキイは祖母ゆずりの、聴きての心を誘い込むような魅力のこもつた話しかたで、よりよい人生への可能の希望を目醒まそうとするのであつた。

この時代から、ゴーリキイの心が溢れて詩になりはじめた。それが重々しくて、荒削りなのはゴーリキイ自身にも感じられた。けれども、自分の言葉で語ることによつてのみ

「自分の思想の最も深い混乱を表現出来るように思われ」しかも、ゴーリキイは、その詩を、彼を「いらだたせる何ものかに抗議する意味で殊更粗暴なものにした。」この生々しく切迫した若者の心持を、彼の教師である数学の学生は、さて、どう理解したであろうか。学生はこう云つて非難した。

「言葉じやないよ、錘だ！」

ゴーリキイは、自分がいかに彼等の意企の正しさを理解し、その点で自分を解くことが出来ぬ力で彼等と結びついたものと感じていよいよとも、やはり自分に対しては彼等が「かなり厳格な態度」をとつていることをも感じずにはいられない。夕方の六時から真夜中まで働き、昼は寝、捏粉の発酵するのを待つ間とパンが炉の中で焼けるのを待つ間しかゴーリキイは本が読めなかつた。書けなかつた。彼はその間でしばしば考えた。「一体、俺はこれからどうなるのだろう。」

この重い時期に、彼にとつて生活の明るさと愛の源泉であつた祖母が死んだ。だが、その悲しみを語り、優しい思い出を話す対手は一人も彼の周囲にはいない。巡査が鳶のようゴーリキイのまわりをめぐり始めた。

学生の集りへ出かけても、本読みは退屈なほど長くつづき、生来論争の好きでないゴー

リキイには「興奮した思想の氣まぐれな飛躍を追うことが困難であり」、いつも論争者の自愛心が彼をいら立たせるのであった。

今日の歴史によつて顧れば、ゴーリキイにとつて苦しかつたこの一八八〇年代の後半は、ちようどロシアの解放運動が一転期に際した時代であつた。以前の「人民の意志」団が分裂して、新たな「労働解放団」などが生れた時代であり、プレハーノフの書いた「我等の対立」などが、ゴーリキイの出る学生の集りでも読まれ、討論された。しかし、歴史的な意味でも若かつたこれ等の学生達は、「加工を必要とする素材」として自分達が眺めていたゴーリキイに対し、時代の意義の重要性をのみ込ませるだけのゆとりがなかつた。当面彼等が興味を持つていてることでないことをゴーリキイが話しあじめると、彼等は忠告した。

「そんなものはやめてしまえ」

だが、ゴーリキイにとつて話したい、打ちあけたい生活の苦痛そのものはやまらない。減りもしない。当時夥しく現れたトルストイアン達の嘘偽の多い生活態度は、慈悲とか愛とかいう問題についても、突きつめた、勤労者らしい鋭い疑問をゴーリキイの心に捲き起した。彼は思うのであつた。「もしも、生活が地上の幸福のために絶間ない闘争であるな

らば徒らな慈悲と愛とはただ闘争の成功を妨げるだけではないか」と。いわゆる温和な人々が余りにも多すぎた。卑俗なものへ適応する彼等の巧妙さ。精神のたわいない移り気、柔軟性、「蚊のような彼等の痛みを觀察しつつ」二十一歳になつたマクシム・ゴーリキイは自分を「馬蠅の雲の中へ脚をとられた一匹の馬のように」感じるのであつた。

折からカザン大学に学生の騒動が始つた。パン焼の窯につめこまれているゴーリキイにはその意義がはつきり分らなかつたし、原因も漠然としていた。パン焼職人の仲間たちは、大学へ学生を殴りに押しかけようとしている。

「おお、分銅でやつつけるんだ！」

彼らは嬉しそうな悪意で云う。たまらなくなつて、ゴーリキイは彼等と論判をはじめた。が、結局自分に学生を護り得るどんな力があるというのであろうか。

ゴーリキイの全心を哀傷がかんだ。夜、カバン河の岸に坐り、暗い水の中へ石を投げながら、三つの言葉で、それを無限に繰返しながら彼は思い沈んだ。

「俺は、どうしたら、いいんだ？」

哀傷からゴーリキイはヴァイオリンを弾く稽古を思い立つた。劇場のオーケストラの下つ端ヴァイオリンを弾いているその先生は、パン店の帳場から金を盗み出してポケットへ

入れようとしているところを、ゴーリキイに発見された。彼は唇をふるわし、色のない目から油のように大きい涙をこぼしながら、ゴーリキイに訴えた。

「さあ、俺を打つてくれ」

この堪え難かつた年の十二月の或る晩、ゴーリキイは雪の積つた、ヴォルガ河の崖によりかかりピストルを自分の胸にあてて、発射した。弾丸が肋骨に当つてそれた。彼は生きた。翌年の春、この出来事によつてかえつて生活に対する滌刺さをとり戻したゴーリキイは、学生仲間で知り合つたロマーシという、シベリア流刑から帰つたナロードニキと、ヴォルガ下流の或る村へ行つた。ロマーシはそこで「人間に理性を注ぎ込む仕事」をし、ゴーリキイはそれを助けたのであつたが、この村の生活で、二人は富農のために店をやかれ、危く殺されそうになつた。農民、特に富農が「理的に生活しようとする人をいかに執拗に憎悪する」かということ、及び、解放運動に参加する一勢力として持つてゐる農村の複雑性、非社会性を、極めて現実的に（トルストイが「イワンの馬鹿」に神を認めたのとは違つた風に）ゴーリキイが把握するに至つたのはこの期間の緊張した経験が役立つてゐるのである。

一八九〇年代に入つては、ニージュニの情勢も移つた。急進的なインテリゲンツィアの

グループは、今やマルクスの著作を読んでいた。「唯物論者」となつた人々の間には、相も変らず盛んに討論が行われている。ロシア全土は、歴史に著名なボベドノスツエフの辣腕によつて窒息させられ、チエホフが友人への手紙に「ロシアは專制によつて滅亡に近づいている」と書いた時代であつた。多くの有能な生命が監獄とシベリヤとで滅ぼされている。しかし坐つて論じている人々は、歴史の必要性というものを自身の偷安の便利な云いわけにつかつた。この時代、ゴーリキイはコロレンコに近づき、コロレンコに於て、信頼するに足るインテリゲンツィアのタイプを見出したのではあつたが、当時の不健全な傾向として現れていた理論の遊びは、ゴーリキイをついに放浪の生活に誘惑した。処女作「マーカル・チュードラ」は實にこの放浪の旅の終りに彼が落付いたチフリスで（一八九二年）書かれたものなのである。

チエホフが、彼の敏感と人間らしい良心によつて、當時一部のロシア・インテリゲンツィアに対して抱いていた忌憚ない反撥と、ゴーリキイが勤労者としての本性によつてインテリゲンツィアの中に、有用なものと不用なもの——むしろ有害なものを嗅ぎわけようとしていたことは、それぞれの価値で非常に教えるところがあると思う。チエホフが、當時の一部のインテリゲンツィアに対して抱いた憎惡の最大な原因は、彼等の頭脳の怠惰さ

であつた。「彼らは、いつも不平をこぼし、躍気になつて何も彼にもを否定します。怠惰な頭脳には、主張することよりも否定する方が容易だからです。」そして、更に、如何にも彼自身がインテリゲンツィアであること、インテリゲンツィアが彼自身の怠け者の同族に向つて感じる厭惡と憤懣とを制せられぬ口調で云つてゐる。「あの手合いのようなお喋りを読む時、露骨に嫌悪を感じます。熱のある患者は食物を摑りたがらず、何か酸っぱいものという漠然とした要求をします。私も亦何か酸っぱいものが欲しい、そしてこれは單なる偶然ではありません」と。

この要求がチエホフに「桜の園」を書かせたのであつたろう。然し、チエホフは自身の誠実な生活の全体で、当時の優秀な知識人が渴望していた「酸っぱいものへの要求」を、漠然としたものなりに歴史の進歩に向つて声明し得たに止つた。

若いゴーリキイが深い苦悩と歡喜とをもつて経験したインテリゲンツィアとの相互関係の歴史は、チエホフの場合と本質的に異なる。いわば新世界の創造の曉に、民衆が半ば目醒め、半ば暗さに置かれながら切実な要求に衝き動かされて熱心に餌じきを求め、直感的にその腐つた部分とそうでない部分とをよりわけたのと似ている。「あの人的心の中には、何か調子はずれなものがあつてよ。……人間の中にそういうものの在るのに気がつくと、

私はその人が肉体的に不具なような気がして来るの。」これは、ゴーリキイがインテリゲンツィアを書いた戯曲「別荘の人々」の中でカレエリヤという女が云う言葉である。ゴーリキイ自身がこのように感覚的に、而も彼の持前である鋭い、生活的な観察、熟考に裏づけられつつ、既成の文化から、発展的なものを吸収して行つたと思われるのである。

一八九八年、社会民主労働党が結成された年、既に「光榮の峰」へ向いはじめていたゴーリキイは政治的活動をしたという理由で逮捕された。「小市民」の上演が禁ぜられ、「どん底」でゴーリキイの名は世界的になつていた。そのおかげで、一九〇五年のかの日曜日の後、ペテロパヴロフスクの要塞監獄に投獄された彼が命を全うしてイタリーヘ政治的移民として住むことが出来たのであつた。

ほぼ二十五年に亘るレーニンとの友情が結ばれたのは一九〇七年のことであつた。「母」を書いて後、「敵」がもう数年前書かれているのに、マクシム・ゴーリキイが一九〇八年から三四年の間にはいろいろ動搖して、召還主義の連中とカブリの労働学校を創立したり、創神派の弁護者としてレーニンに彼らとの妥協を求めたりしたことは、我々の注目をひきつける。この時代ゴーリキイは、ロシアを離れていたことからも一九〇五年後の民衆の成長のテムポと方向とを十分掴めなかつたと同時に、今日の目で観察すれば、彼は或る意味

で「私はそれを知っている」と確信をもつて云い得るもののが陥り易い一つの誤りに陥つていたことが理解される。ゴーリキイが、ロシアの民衆を最もよく知つているのは自分であると思つていたことは自然なことであろう。彼は一九〇五年の失敗を、大衆が十分組織をもつていなかつたからであると知らず、外部からの力の不足を認識するにつれ、民衆は民衆の中の独自な力、神によつて解放されると希望を求めたのであつた。ゴーリキイの素朴な的をはずれたこの心痛を、創神派の連中は利用した。彼等のインテリゲンツィア的理論づけ、組立ての外観が、当時に於て一過渡期にいたマクシム・ゴーリキイを一時搦め込んだのである。四十歳になり、世界の作家ゴーリキイになつていた彼は、この時、二十代の生一本さを失つていたとともに、知識で装つた敵を破るだけに力強い眞の民衆としての世界觀をも未だ確立させていなかつた。レーニンがゴーリキイに、噛んでふくめるようにその誤りを説いている書翰集は、今日に於ける尊い遺産として忘れぬ価値をもつてゐるのである。

こういう興味あり且つ重大な動搖を、生涯にゴーリキイは一度ならず経験している。一九一六年にロシアの警保局が莫大な金をつかつて『ロシアの意志』という、殆ど革命的新聞を発刊し、アンドレーエフや、ブーニン、クープリン、ソログープなどを動員したこ

とがあつた。その時、極く少数の作家がそれへの参加を拒絶したのであつたが、ゴーリキイも自分の文筆の意味を全く正しく評価し、当時としては格外に高い原稿料を払つてその作をのせるという誘惑的な申出に勝つた。

この場合、ゴーリキイが作家の価値及び一般急進的インテリゲンツィアの任務に加えた評価は、褒むべきであつたが、彼のその気持は一九一七年の一大画期に於て、再びレーニンと対立するような結果を導き出した。

ゴーリキイは、「十月」の震撼的高揚の後にも「大衆の理解力は依然として外からの指導を必要とする力として残るであろう」としか考えられなかつた。過去百年の間にロシアのインテリゲンツィアがなした準備、「彼等が労働者の心に社会的ヒロイズムと教養とを与えたから」こそ今、「十月」を招来せしめたと見るゴーリキイには、レーニンが、インテリゲンツィアを新社会の指導力の中心に置かぬことを理解しかねたのであつた。彼がこの点について、自身の判断が誤つていたことを実感をもつて理解したのは、おそらく一九二八年、ゴーリキイが五年ぶりでソヴェト同盟にかえつて来た時ではなかつたろうか。その晩年に於て彼が「過去に於て勤労階級の有能な才能は實にしばしば彼らを低く止めて置くところの力に奉仕させられた」と実感をこめて云つている短い言葉の中には、卓抜な人

間的・文学的才能にめぐまれつゝ民衆の一人として経て来なければならなかつたゴーリキイの、すべての時代的な真価と誤りとが率直に含蓄されていると思う。

マクシム・ゴーリキイは「錯雜した歴史の事件の中に自分自らを見出し、そして全人類的なもの、善なるものを創造しつつある意志に自分の意志を沿わせ、人生の意義をその中にふくむ偉大な創造に障害を与える意志に対立すること」が、作家にとって一番大切なことであることを身をもつて示した作家であった。マクシム・ゴーリキイは歴史の正しい進展のために文学の仕事をもつて献身し、その歴史の輝やかしい達成のうちに彼自らをも成り成らした。歴史性と才能との関係について稀有な典型を示しつつ彼の六十八年の生涯を終つたのである。

〔一九三六年八月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十巻」新日本出版社

1980（昭和55）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第八巻」河出書房

1952（昭和27）年10月発行

初出：「改造」

1936（昭和11）年8月臨時特大号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003年1月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

マクシム・ゴーリキイの発展の特質

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>